独り相撲

魚澄蒼空

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

当たり前だと思っていた。

君と過ごしてきた日常も。君とこれから過ごす時間も。そして、君の隣に居る未来も。

でもどうやら、それは僕の独り相撲だったらしい。

※再掲作品です。

目次

プロローグ　上 ―― 1
プロローグ　下 ―― 4
第1話 ―― 12
第2話 ―― 25
第3話 ―― 42
第4話 ―― 58
第5話 ―― 76

プロローグ　上

戸山香澄は、僕の幼馴染だ。

物心つく前から、僕と彼女は常に一緒だった。

切っ掛けなんて覚えていない。母親曰く、僕らが彼女の家のお隣に越してきてからすぐにはもう仲良くなっていたらしいが、そんなことは別段どうでもよかった。

彼女は僕にとっての太陽だった。

爛漫な笑顔に、溌剌（はつらつ）とした性格。太陽がその光で照らすように、彼女は僕に多くの景色を見せてくれた。

正直、僕とは正反対だ。いや、もしかしたらそれがよかったのかもしれない。丁度磁石の対極どうしを思い浮かべてもらうと解りやすいだろうか。きっと彼女に引き寄せられて、新しい世界へ引っ張り出されたに違いない。僕はそう考えた。

そして恐らく、そんな考えが生まれ始めた頃にはもう、僕は彼女に恋をしていた。

そこには本によく書かれている焦がれるような熱情とか、張り裂けるような胸の痛みだとか、そういった類のものは一切なかったけれど。それでもこれが恋なのだと、僕は胸の中でその感情をそっと抱いて温めた。

――彼女の隣にいたい。

そう自覚してから数年。僕は変わるための努力を試みる。

読書という趣味が造り上げた生白い身体を、まずは鍛えようと慣れない運動に励んだ。

内向的な性格を直そうと積極的に人とのコミュニケーションに勤しみ、高校生になってからはバイトを始めた。

その甲斐あってか、旧い友人からはよく「変わったね」と言われる。

その言葉にどんな意味が含まれているかは量りかねるが、概ねいい方向で捉えて間違い無いと思う。

事実、僕を見る周りの目は変わったし、自慢ではないけど、女の子たちからそういう言葉を受けたこともあった。

では、彼女はどうだろうか。

筋トレの成果が身体に現れた時には、彼女もすごいすごいと騒ぎながら胸やら腹部やらに手を乗せてきた。

皆が笑うような面白い話をすれば、声をあげて笑ってくれた。

でも、それでも。

彼女の瞳は、小さい頃からずっと変わらない眩さで、ただ僕を見ていた。

それはなんだか悔しくて、けれど何処か安心できる反応でもあった。
だってそれは、彼女の中で僕という存在が、何も変わっていないということだから。
そんな絶対的な立ち位置にいるのだと、そんな呑気な優越感に浸っていたのだ。
だからこそこれまでも、そしてこれからも彼女の隣にいるのは僕なのだと。
今思えば、思い上がりも甚だしい。無根拠で、無鉄砲で、夢想的な自己陶酔。
でもそんな幻想を抱けたのは、偏に彼女と自分との間に横たえる時間からだった。
僕は彼女のことならなんでも知っている。彼女も僕のことならばなんでも理解してくれている。
積み上げてきた時という不変の事実が魅せた夢。
けれど、夢はいつか覚める。
緩やかに白んでいったり、泡が弾けるように散ったり。兎に角、夢は無に帰する。
それが僕にとって後者だったというだけのこと。
そして――
「私、好きな人ができたんだっ！」
――その夢は些か以上に長すぎた。
ただ、それだけのことだった。

プロローグ　下

昔、二人で遊んでいた時のことを思い出していた。

確かその日は雨で、家の中で鬼ごっこをしていた。室内を走り回っていたはずみで、僕の父親が買った高い皿を割ってしまったんだっけ。

彼女と顔を見合わせ真っ青にして、そこから大慌てで修理と言う名の隠ぺいに移った。

けれど幼い子どもが時価五万の有田焼の大皿を修繕する方法など知るはずもなく（というか今でも知らない）、その姿は木工ボンドによって見るも無残なものへと変貌していった。

破片を無理矢理に継ぎ合わせた所為で各所は断片同士が噛み合っていなかったし、はみ出たボンドが固まって、陶磁器と比較して明らかに異質な白が表面に盛り上がっていた。

当然すぐにバレて怒られたが。

そんな継ぎ接ぎだらけのその場しのぎ。

でもきっと。

「私、好きな人ができたんだっ！」
今の僕は、それ以上に不出来な贋作だったに違いない。
引き攣りそうになる頬を抑え込み、そんな思考が脳裏を過った。

▽

「……それで？」
震えそうになる声を平生のそれに押し戻そうと捻じ曲げた結果、妙に力が抜けたものが喉から発せられた。
僕は今、『唐突に部屋に突撃してきて訳のわからないことを言う幼馴染に辟易する僕』を、きちんと演じられているだろうか。
そんなことは分からない。だから、僕はまだ言葉を続ける。
「いきなり押しかけてきたかと思えば、君は何を言ってるのさ？」
勉強中だと示すために、シャープペンシルを掌で二、三回ほど回して弄ぶ。
握る手に力が入るのを、彼女は見逃してくれているだろうか。
「え～！　反応薄くない!?」
懸念は杞憂だったようで、僕のベッドに勢いよく腰を下ろした彼女はその対応に非難

の言葉を浴びせる。
「だって僕、リアクション芸人じゃないし」
その返しが気に食わなかったらしく、更に子どもがやるみたいに頬を膨らませた。リスのような愛らしい仕草は、まさにいつもの僕が知っている香澄だった。
でも。
「でも、幼馴染の、その……初恋、なんだよ?!　もうちょっと驚いてもいいじゃん――！」
「――ッ！」
次に見せた表情は、全く僕が知らない彼女だったのだ。
薄く染まった頬に、躊躇うように彷徨く視線。たった数瞬の光景が、僕の網膜を捉えて離さなかった。
ギリ、と歯を噛み締める音が聞こえた。握るペンから、軋む音がした。
さっきも言ったけど、僕は彼女のことなら何でも知っていると思っていた。十五年もの付き合いで構築される僕らの関係には、全ての事象が何のほころびもなく詳らかに広げられているものだと。少なくともそれが僕にとっては自明の理だった。
だけどそれは違った。自明などというあやふやな定義を鵜呑みにした愚かな男は、ひどく勝手な自己満足で完結していた。
まあそれも、ついさっきまでのことなのだが。

顔を俯かせる。
これ以上見ていられない。見てはいけないと思った。
「そっか。香澄が恋、か」
辛うじて呟く。何か言わなければならない。大岩の戸からひり出した言葉だった。
「うん。その人のこと考えるとね、すっごくドキドキするんだっ」
顔は見えずとも、その声がとても弾んでいて。どんな表情をしているのかなんてものは嫌でも解ってしまう。本当の意味で彼女を理解なんてしていなかった癖に。
そして僕の様子には気づいていないらしかった。それはそうだろう。今彼女は、恋という感情の熱に浮かされているからだ。
周りのことなんてまるで見えていない。これまでの僕を見ている気分だった。
「でもさ、何でまた僕に？　報告してる暇があるなら直接言いに行けばいいのに」
だからという訳でもないけど、少し意地の悪い質問をしてみた。
それは遠回しな拒絶のつもりでもあった。勿論、僕としては到底聞きたい話ではなかったから。
「うっ。それはその、まだ言う勇気が……」
特徴的な形に結わえた髪の後ろあたりに手をやって、力なく笑う。
でもね、と付け加えて、彼女は僕を真っ直ぐに見る。

そして次の瞬間、決定的な一言を言い放った。

「やっぱり、一番最初は君に言いたかったんだ。ずっと一緒にいて、家族みたいな感じだし！」

――最早、呑む息すら漏れなかった。

彼女の言葉で、僕は目を逸らしていた現実を叩きつけられた。

家族みたいなもの。

結局僕は、彼女の眼中に掠りもしていなかったのだ。

絶対的な自信に繋がっていた膨大な時の流れは、ただ僕を彼女からの『異性』としての視線を隔てる壁でしかなかった。そう言う積み上がり方でしかなかった。

それがなければ彼女に好かれていたなどと思っているのではない。でなければ、僕は変わるための努力をすることはなかっただろう。

だとしても。

――ずっと一緒にいた？　そうだよ。僕が君と一番長く過ごしてきた。何よりも、誰よりも君を想っている。

――だから最初に報せるのは僕がよかった？　ふざけるなよ。僕は君の傍で、君を……。

なのに。

――なのにどうして君のその表情の先には、他の誰かがいるんだよ。
ドス黒い感情がふつふつと沸き上がった。あまりにも利己的で醜悪な負の塊。
それが僕だった。僕と言う人間だった。
「家族、ね」
くつくつと笑いが漏れた。もう、嗤うしかなかった。
「じゃあ僕が兄貴で、君は妹だな」
「私がお姉ちゃんじゃないの？」
「それはない」
「え～！」
そんな歪んだ欲求を、すんでのところで抑え込む。そうできたのは人と関わる中で身についた渡世術のお陰だった。
彼女と並ぶためにと得たそれは、醜い僕を隠す蓑として存分にその力を発揮していた。
「で、ただ報告しにきたって訳じゃないんだろ？」
「うん、えっとね……」
「さしずめ、男目線からの協力が欲しいってところかな」
「凄い、なんで分かったの？」

「当たり前じゃん」
目をまん丸にして驚く彼女に、僕は薄く笑った。
「――だって僕らは、家族なんだからさ」
大？吐きの、汚い笑みだった。

▽

それから少しだけ話をして、香澄は帰っていった。これから彼女はバンドメンバーとの練習があるらしい。
そう言えば、彼女がバンドをやると言い出したのも、本当に唐突だった。
幼い頃から探していたものが見つかったのだと目を輝かせて言った彼女を、僕は快く応援した。手伝えることがあれば何だってやった。
思えば、その時も僕は一抹の寂しさを覚えたものだった。
ライブが近づくと練習は多くなり、その分だけ会える時間も減った。できることと言っても素人の僕がやれることなんて、高が知れている訳だし。
そんな僕が彼女を応援したのは、その先にあるものの違いだろう。
隣でなくとも、後ろから見守る形で彼女の夢を一緒に眺めることができるのなら、そ

れでよかった。
だけど、今は――
「――」
それでも僕は、彼女の恋を応援する。
だって、それが僕の在り方なのだから。
それを捨ててしまえば、僕は僕でいられなくなるから。
だから僕は――
唇を噛む。掌に爪が食い込んだ。濃い鉄の味がした。醜い男の味だった。
――僕はこれからも、僕を突き通す。
さぁ、独り相撲の始まりだ。

第1話

「俺さ、戸山って結構いいと思うんだよね」
昼下がりの屋上。
藪から棒に言った友人に、僕は焼きそばパンの袋を開けようとしていた手を止めた。
「おいおい、急にどうした？」
その傍らにいたもう一人の友人が笑いながら問いかける。それに対して、彼はおにぎりを咀嚼しきってから「いやね」と言葉を続けた。
「最近なんかいいなって」
「何だそのふわふわした理由」
要領を得ない発言を笑い飛ばされると、彼は熱が入ったように身を乗り出した。
僕は相変わらず焼きそばパンの袋を開けれずにいた。
「元から可愛いとは思ってたんだけどさ、それが増してきてんのよ。男かな？」
パンを落としそうになった。皺が寄った袋を置いて、手元のイチゴ牛乳を取った。甘い。このわざとらしいまでの甘さが、僕は好きだ。
そんな僕の横では、納得がいったらしいもう一人の友人が同意する。

「あぁ、言われると確かに。何かこう、良くなったよな」
「お前だって適当じゃねえか」
「うるせー」
　そんな会話を彼らは繰り広げる。何処が良いだとか何時からだったのかだとか、間に咀嚼を挟んではぽつぽつとそれは流れていった。
「で、幼馴染としてはどうよ？　何か変わったこととかあんのか？」
　流れがこちらに来た。ニヤリと話題を振ってきた彼を見てストローから口を離し、しばし長考する。ふりをする。
「ん……、どうかな。別に香澄はいつもの香澄だと思うけど」
「うわ、幼馴染の余裕だ」
「余裕って。別にそんなのないよ」
　本当にそんなものはない。本当に。
　ストローを噛んだ。プラスチックの無味だった。
「ふうん。でもやっぱり何かあるんじゃねえの？　ほら、俺の幼馴染がこんなに可愛いはずがない！　みたいな」
　何処か聞き覚えのある言い方だ。僕は曖昧に笑って、彼の冗談を受け流す。受け流さなければならなかった。

側から見れば何てことのない会話の中で、僕はこんなにも動揺を覚えていた。
――恋をすれば女の子は変わる。
そんな言葉は、とうの昔に使い古された、少女漫画の世界でだけのものだと思っていた。
でもそれは案外的を得ていたようで、確かに僕の目から見ても彼女は、最近になってより一層その輝きを増していた。
それは僕の思い違いではなかったらしい。彼らの話からもそれは確かだった。
そして、そんな彼女が見つめる先には……。
思いっきり袋を破る。濃厚なソースの香りがした。
「マジか。だったら俺、ちょっとアタックしてみようかな」
「おい待てよ。だったら、コイツの許可が必要だろ？」
肩を無理やり組まされて引き寄せられた。よろめいて横を見たら、定番のセリフを言う。咳払いをして、厳かに、しかし面白おかしく。僕は道化の仮面をかぶっていた。
「お前にはやらん」
「「親か！」」
どっと笑いが起こる。良かった。この回答で間違いはなかったらしい。
沸き上がる胸の内を、くだらない笑顔で隠す。この作業にも良い加減慣れねばならな

い。漏れそうになった溜息を、僕はパンごと飲み込んだ。
「親じゃないよ。……まぁでも、家族みたいだってとこは同じだけど。結局長い付き合いだとさ、今更そういう目で見られなくなるんだよな」
「そういうもんか」
「そういうもんさ」
——彼女にとっては。
勿論、最後の一節を口にすることはしなかった。自分に言い聞かせるつもりで発した言葉は、目を逸せない現実として突き刺さってくるだけだった。
誤魔化すつもりでイチゴ牛乳を飲む。何故だか、味はしなかった。
暫くの静寂を挟んで、予鈴が鳴った。
「あ、五限目なんだっけ」
「うわ、体育だ。早くいくぞ！　じゃあな！」
いそいそと片付けをし終えて屋上を去る二人。彼らとは違うクラスだ。
緩く振っていた手を下ろし、僕ものろのろと片付けを始める。
天気は快晴。こんな日に体を動かせれば、少しは気も紛れそうだ。僕のクラスも体育だったら良かったのになと急いで着替えに行った二人を羨みつつ、グラウンドに出る生徒たちを一瞥して、屋上を去った。

▽

チャイムが鳴るといっても、授業開始までは少し時間がある。それを知っているから別段急ぐことはしない。それこそ、体育なら話は別だが。

気持ちの良い日差しを浴びながら中庭を歩く。

「おーい！」

ふとその時、上から僕を呼ぶ声が聞こえた。

見上げると、二階の窓から香澄が手を振っていた。少し切羽詰まった表情だ。何かあったのだろうか。

「何ー？」

「キミの体操服貸してー!!」

「はっ？」

唐突な要請だったから、僕がそんな間抜けな声を出したのも無理はない。

だが彼女はそれを聞こえていないのだと解釈したらしく、もう一度大きな声で言った。

「だから、体操服貸して!!　私忘れちゃったんだ～」

違う、そういうことではない。

今のは男子にそれを借りようとする行為に対しての反応だ。

「いや、女子に借りろよー！」

断ろうと返すが、向こうも負けじと大声で返してくる。

「今日体育あるの私たちのところだけなのー！」

言われて思い出した。僕たちの通う学校は、そこまで生徒数が多くない。というか寧ろすこし少ないくらいかもしれない。

そんな訳で、体育が行われるクラスがあったとして、他のクラスでもその日に体育があるとは限らないのだ。

今日は僕のクラスともう一クラスで体育はなくて、彼女のともう一つのクラスである日らしかった。

「でもキミ、確か持ってたよね?!」

「い、一応あるけど……」

体育当日の荷物が時間割の関係で多くなるので、僕はいつも前日に持ってきて置いているのだ。

なんで彼女がそれを知っているのだろうか。いや、もしかしたら話していたかもしれない。

そんなことはどうでもいい。兎に角彼女を諦めさせなければ。

「お願い！　頼れるのキミだけなんだよ～っ!!」

だけどその一言で、僕の開きかけた口はそこで停止した。

僕は今、彼女に頼られている。そう考えてしまうと、もう何も言うことができなかった。

自分でも意志の弱い人間だとつくづく思う。だけど僕だけが頼りだという言葉の甘さが、僕の判断力を鈍らせたのだ。

「……分かった。でも明日洗って返せよー！」

「ありがとうっ！　じゃあ借りていくね！」

にこぱっと無邪気な笑顔を振りまき、彼女は窓から体を引っ込める。僕の体操服を取りに行ったのだろう。

先程は抑えられていたため息を、今度は遠慮なしに吐いた。

やってしまった。

僕は今彼女の為になるどころか、その逆になるかもしれない行動をやってのけたのだ。

誰でもわかることだとは思うけど、男女間で衣服の貸し借りなんてことは普通あり得ない。仮にやったとしたら、その二人の関係は周囲から変に勘繰られるものだ。

彼女の性格や僕らの関係が周知のことであっても、何も思わない図太い人間はそういない筈だ。

それは無論、彼女が想いを寄せている誰かにも当てはまる。

もう一度ため息を吐く。

そいつが誰かなんて知らない。訊き出そうとしたものの、彼女は「恥ずかしいから」と僕に名前すら教えてくれなかったからだ。

けど訊いていく過程で、そいつが校内の人物であることは分かった。

だからきっと、そいつは僕の体操服を着る彼女を見てしまう。そうなったら、彼女を恋愛対象として見る可能性も減るだろう。

僕はそこまで解っていた上で、彼女のお願いを聞いてしまった。いや、「聞いてしまった」のではなく「聞いた」のかもしれない。罪悪感の裏には、そんな汚い打算が潜んでいた。

本当に、僕という人間は……。

「っと、やば」

グラウンドから体操の号令をかける声が聞こえてきた。

ふと時計を見やると、あと一分ほどで授業が始まる時間になっていた。考え事に気を取られ遅くなっていた歩調を速めに、教室へと急いだ。

▽

チャイムと同時に教室へ滑り込む僕を、先生含め皆がお前らしくないなと笑ったので、なんとかお咎めはなしだった。

席に着いて、黒板に書かれるアルファベットの文字列を無理矢理に頭の中に押し込む。

文字というのは不思議なものだ。一つ一つは意味を成さない線。それが群れることによって初めて、数多の意味が漂う言葉という海原の欠片になり得る。

では、僕はどうだろう。僕を僕たらしめるものとは、一体何なのか。

彼女への気持ちと、自分の気持ち。それは同じようで、確かに何かが異なっている二つだった。

矛盾だらけの僕は、一体何を抱えて何処を目指して歩いているのだろうか――

たった体操服の一枚に、僕はどうにも煩悶させられていた。

「ねえ」

そのとき、横から軽く肩を叩かれた。トンという小さい衝撃の発生源へと目を向けると、隣の席に座っているクラスメイトと目が合った。

「今、ペアワークの時間だよ」
「あ、ごめんね。山吹さん」
気の抜けた僕の返事に、大丈夫と返す隣人の彼女は、山吹沙綾さん。
彼女は香澄が所属するバンド、『Ｐｏｐｐｉｎ’Ｐａｒｔｙ』のドラマーである。僕の方に伸ばされていたか細い腕からは、想像もできないような力強い演奏をするのだ。
そんな縁もあってか、彼女とはよく話をする間柄でもある。
「でも、キミがぼーっとするのって珍しい気がする。どうかしたの？」
「いや、何だろ。最近ちょっと疲れてるのかもしれないや」
だからと言って、この胸中を素直に語ることはしない。僕の問題は僕の中で終わらせるべきものであって、他の人に話したところでどうしようもないのだ。
「大丈夫なの？　もしキツいなら、今日はお店手伝わなくてもいいけど……」
「ううん、そこまでのことじゃないから、ちゃんと行くよ。亘史さんも、今日は発注した機材の搬入があるって張り切ってたし」
眉を八の字にして彼女は尋ねて、それに僕は笑顔で返した。
僕は彼女の実家であるパン屋、『やまぶきベーカリー』で働かせてもらっている。商店街に位置するお店なので僕の家からはすこし離れた場所にあるのだが、訳あって現在のバイト先となっているのだ。

「そっか。いつもありがとね」
「お礼を言われることでもないよ。時給貰って働いてるだけなんだからさ」
「変なところで素直じゃないよね、キミって」
「そうかな」
「そうだよ」
軽口を叩いていても、ふわりと笑う山吹さんは綺麗だった。彼女の母親に似ているなと思った。
山吹さんのお母さんは、体が弱い。家族だけで切り盛りしているやまぶきベーカリーにとって、一人でもダウンしてしまうことは、店が機能不全に陥るのを意味していた。
慢性的な人手不足。それが原因で山吹さんは一度はバンドを諦め、勧誘する香澄と衝突することもあった。
最終的にはＰｏｐｐｉｎ，Ｐａｒｔｙの皆や家族、元いたバンドの友人に背中を押された彼女はもう一度ドラムを叩くことを決意したのだが、依然として店の問題は残っていた。
そこで僕は、やまぶきベーカリーの手伝いを申し出た。
知り合いである彼女への情も、その熱意への感銘もあったことは間違いない。
でも、何よりもそれは香澄の為だった。

香澄の求めるキラキラドキドキ。それに山吹さんが必要で、だけど彼女には事情があって。僕にはその枷を外すことができた。だからそうした。ただそれだけだった。

僕は山吹さんに感謝されるような謂れはないのだ。

幼なじみの気持ちも解らず、一人で勝手にのぼせ上がっていた、そんな愚かな男なのだから。

「こーら。またぼーっとしてる」

マイナスな方向に陥っていた思考を、山吹さんの声が引き戻す。

はっとして彼女を見ると、予想よりも近い位置にその整った顔が在った。

「ご、ごめん」

「……本当に大丈夫？　無理、してない？」

さらにずいっと詰め寄られた。緩くウェーブのかかったローズブラウンの艶やかな髪が揺れて、微かに爽やかな匂いがした。大きな空色の双眸は、僕の顔をしっかりと捉まえていた。

近づいてくる彼女にたじろぐが、それが本当に僕を心配してくれているからこそだということに気がついて、少し自分を恥じた。本当に、君は優しい。

そんな優しい彼女にだからこそ。

「大丈夫だよ。ありがとう」

「ならいいけど。何かあったら話、してね。約束だよ！」
「うん。約束する」
　――こんなに穢い感情を、見せてはならないんだ。
「よーし、ペアワークの時間は終わりだ。じゃあ……山吹たちに答えてもらうか」
「あ、やばっ。私たち、何も考えてないじゃん！」
　慌てて教科書に目を通す山吹さん。そんな彼女に構うことなく、先生は質問を始める。
「この段にある『Ｉ　ａｍ　ａｔ　ｓｅａ．』という短文の意味だが、単純な訳では内容に齟齬が――」
　山吹さんに倣って、言われた部分を一瞥した。
　――やり場のない本当の僕は、造られた僕の内側で、やがてぐずぐずに腐り始める。
　居場所なんてものはない。
「――だから、内容に合った形でこの文を訳すならどうする？」
　友人にさえ嘘を吐き始めた僕は。
「途方に暮れる、です」
　海原を行く、帆のない小舟だった。

第2話

体が重い。全身の筋肉は軋むような痛みを訴えて。僕の思考を鈍色の箱に押し込めてくる。

起き上がるのが億劫で、手を伸ばしてスマートフォンを起動させ、現在の時刻を確認した。

七時半。普段ならばこの一時間以上前には起床しているのだが、今日はどうにも動く気が起きなかった。

……まあ、原因は分かりきっているのだが。

一言で言うのなら、過労だ。

昨日の放課後、僕は直ぐにやまぶきベーカリーへ駆けつけた。それから閉店まで殆どの仕事を、いや、閉店後の片付けまで進んで引き受けたのだ。

兎に角、働きたかった。休む間もない激流の中で、ひたすらに作業に没頭したかった。そうすれば何も考えずに済むと、そう思ったから。

結果として残ったのは、無理をした代償だと言わんばかりの筋肉痛だけ。暗鬱な気色に、僕は気怠い鈍痛まで引っ提げて帰路に就くハメになった。

パン屋の仕事は、意外にも力仕事が多いのだ。昨日は新しい機材の搬入もあったので、それに拍車がかかったことは否めない。山吹夫妻の制止も振り切って押し通したのは、自業自得としか言いようがなかった。

学校、休もうかな。

そんな考えが浮かぶと、ズブズブと泥の中に埋まっていくような錯覚を覚えた。安物の硬いベッドでも、その布団に沈み込んで、一体化していく感覚。

スプリングがギシリと軋んだ。階下から起きろと告げる母に生返事を返して、僕は毛布を被った。

あ、でも……今日休んだら山吹さんが無理をさせたと思ってしまうかも。そうなったら、申し訳ないな。

段々と落ちてくる瞼の裏側で、ふと山吹さんの顔を思い浮かべて。

――まぁ、どうでもいいや。今はただ、眠りたい。

瞼が落ちた。でも、決して寝苦しくない春の丁度良い気温の中で、僕は何故だか寝返りを打つ。

そんな緩慢な動作では振り払えない霧を纏いつつ、何度も、何度も。

真っ暗な視界には、ある像が結びつく。

今でもはっきりと思い出せる。僕が知らない、彼女の女の子としての顔。

それはどうしようもなく愛おしくて、どうしようもなく憎らしかった。

だって、その表情で君が見るのは、他の誰かなのだから。

可笑しいじゃないか。僕は君の隣にいるために、この数年間を費やしてきた。

分かっていたんだ。前までは隣にいたなんて思っていたけど、実はそんなことはなくて。君は僕のずっと前を進んでいるのだと。

だからこそ、いつも僕の前で笑う君の、後ろじゃなくて隣で。一緒に笑い合いたかったから僕は頑張ってきた。

だと言うのにまだ顔も見たことのないそいつは、血の滲むような研鑽を嘲笑って彼女の心に居座っている。

――そこは僕の居場所だ。

ぽっと出の人間が、好き勝手に踏み荒らす場所であっていい筈がないんだ！

……。

……いや、解っているさ。本当は。

僕の言い分は全部自分のことしか考えていない。どこまでも利己的な屑。

こんな男に、一体誰が惹かれると言うのだろう。

昔の僕を知る知人は、誰もが変わったねと肯定的な風にもてはやす。

だけど、進歩したものなんて何もなくて。装った外面の内側では、歪んだ欲望が膿になって心を蝕んでいる。

変わったという彼らの言葉は、確かに正しいのかもしれない。

自分がいつか辿り着くと信じて疑わず、一方的な期待をぶくぶくと膨れ上がらせた醜悪な感情は、もう戻れないところまで来てしまった。

何がいけなかったのだろう。何時からこうなってしまったのだろう。

僕は何の為に、誰の所為で……。

お願いだ。

誰か、僕を見つけてくれ――

「おっはよー！」

その時、部屋の扉が開いた。

顔を覗かせる何も知らない彼女は、変わらない眩い笑顔で、僕を見つめていた。

▽

無垢な笑みを向けられた僕は、暫くの間茫然と固まっていた。突拍子もなく開け放たれた扉の音と彼女の明るい声が、心の中の囁きをかき消してしまったようだった。

そんな僕を見て、彼女はきょとんと首を傾げる。

「あれ？　もしかしてまだ寝惚けてる？」

「……あ、あぁ。今起きたとこなんだ！」

咄嗟に返事をする。数瞬遅れたのを寝起きの所為だと解釈したらしく、彼女は「そっか」と納得したようだった。

「おばさんにね、キミのこと起こしてきてって頼まれたんだ！　ついでに朝ごはんも食

べていきなさいって！」

どうやら彼女は僕の母に朝食で買収されていたらしい。朝食がそんなに嬉しいのか、笑顔のまま僕の手を握るとぐいっと引っ張った。

柔らかさと、熱心にギターの練習をしていることを実感させられる、でこぼことした固さを持つ小さくて温かい手。

そしてそんな手とは不釣り合いなくらいに、引っ張る力は強かった。筋肉痛を引きずっていた身分としては有り難い。その力を借りて少し呻きながら起き上がると、彼女の姿が視界いっぱいにうつった。

カーテンの隙間から差す朝日に照らされる綺麗な鳶色の髪は、一本一本が職人の紡ぐ極上の絹糸のようで。制服越しの身体は、女性的な柔らかさを感じさせる曲線をゆったりと描いていた。

見惚れていた。いつもと変わらない筈の彼女に、僕の視線は杭を打たれたかのように貼り付いていた。

それは、多分……。

「ぷっ、あははは！　キミ、寝癖凄いよ～！　ライオンみたい！」

「うわっ、ちょ、やめろよ！」

突然の彼女の行動に、頭が真っ白になった。

僕の頭を見て吹き出したかと思えば、わしゃわしゃと髪を弄り回してきた。
「キミの髪って触り心地いいんだよね。さらさらでふわーっみたいな！」
「君の擬音表現はよく分からない……」
「そうかなー？」と宣う彼女。ひとしきり弄ったからか、満足気に僕の頭から手を離した。
「そういや、朝に来るなんて珍しいじゃん。何か用事？」
「うん。これ、昨日借りた体操服！」
「あ、ありがとう」
そう言って、彼女は袋を差し出してきた。なるほど、それを返しに来たつもりが、僕を起こす役目を押し付けられてしまったと。
「昨日は本当に助かったよ～。なんでか有咲には怒られちゃったけど」
「あー……。まぁそれが普通の反応だね」
有咲というのは、香澄のバンドでキーボードを担当している市ヶ谷さんのことだ。
いつも香澄の奇行に頭を悩ませているらしい市ヶ谷さんは、きっと昨日も異性で衣服の貸し借りをすることの異常性について彼女に語って聞かせたに違いない。
この様子だと、全く理解していないようだけど。
そりゃあ、彼女からしてみれば理解不能なのだろう。

家族ならばそれくらい当然だと思っている、彼女からしてみれば。

ジクリと、傷口が広がるような痛みが走る。一人勝手に自爆した僕は、苦笑いしながら市ヶ谷さんの対応に不満を漏らす香澄を諌める演技をしていた。

思いの外、僕という人間は単純だったらしい。いつもと変わらない、いつも通りの彼女がそこにいて、それに安堵している自分がいた。

だからさっきのも、見惚れていたというよりはそんな彼女の姿を確認していただけに過ぎなかったのかもしれない。

でもそれは詰まるところ、裏を返せば停滞しているというだけのことであった。いや、停滞という言葉は相応しくないだろう。

そもそもが、彼女の中での僕という存在は違っていて。

家族という関係で打ち止めになっているのだから。

階下から再び母の呼ぶ声がした。朝食ができたらしい。

「あ、ご飯できたんだね。行こっ」

「……あぁ」

「あれ、まだ反応が微妙だ。ひょっとしてまだ眠い？」

「……うん、そうかもしれない」
「キミこそ、そう言うなんて珍しいね。あ、もしかして夜更かししてたとか？」
「ううん。そんなんじゃないんだ。ただ……」
「？」
この貼り付けた笑みも、きっといつかは根を張って、本当の笑みと取って代わるのだろう。
それが何時かは分からない。
けれど、それは。

「……ただもう少し、夢を見ていたかったなって。それだけだよ」

夢が醒めて、完全に消えて無くなってしまう頃なのだろう。
確信めいた予感が、頭の中で渦巻いていた。
目の前で首を傾げている彼女に向かって、にっこりと微笑む。
「先に行ってていいよ。僕は着替えてから行くから」
「あ、うん。じゃあ先に行ってるね！」
踵を返した彼女は、階段をとととと降りていく音がして次第に小さくなっていく。

受け取った袋を覗くと、急いで持ってきたのか、僕の体操服は少し不格好な形に畳まれていた。
袋から取り出して、それをゆっくりと顔に近づける。
鼻に押し当てて、深く息を吸った。
そこに在るのは、仄かに香る柔軟剤の芳香だけで、昨日まで確かに在った筈の彼女の匂いなんてものは、もう何処にもなかった。
全ては過去のことだと、そう告げるかのように。

▽

朝食を終えると、僕と彼女は連れ立って家を出た。いつもよりも豪勢なそれに舌鼓を打った彼女は、ご満悦に鼻唄まで歌っている。
母は彼女を気に入っているのだ。だからいつも彼女が朝食にご同伴する時には、その内容は格段に上質なものになる。
今日も少し高い食パンを使っていたし、サラダにはベーコンがたっぷり入っていて、目玉焼きは卵二つ分になっていた。おまけにスープとデザートが付くとなると、もはや喫茶店で朝のセットメニューとして出しても問題はないだろう。母の料理の腕は、主に

彼女のために振るわれるのだ。
　朝が低血圧気味の僕としては、有り難い反面、少し胃のもたれるくらいのボリュームだったが。その分は彼女が食べてしまったので大丈夫だ。
「いやー、有咲のお婆ちゃんが作る和食もいいけど、おばさんの洋食も美味しいんだよね！」
「あれは君が来たから張り切ってるだけ。いつもはもっと質素だよ。夕べ残った米と納豆とか、そんな感じ」
「う、納豆……。あ！　じゃあじゃあ、私が毎日来てあげよっか？」
「多分、その分弁当とか夕飯が質素になるだけじゃないかな。……主に僕と父さんの」
「それもそっかぁ」
　自分の家で食べる選択肢はないのかと訊くのは、この際野暮なのだろうか。
　信号待ちで止まっていると、数台の車が前を通り過ぎて、整えた髪がまた跳ねやしないかと頭を気にした。
「て言うか、また市ヶ谷さんのとこでも食べてたんだ」
「うん。有咲のお婆ちゃんの卵焼きってね、すっごく美味しいんだよ！　甘くてふわふわなの！」
「あ、それいいね。僕のとこは少ししょっぱいんだ」

「じゃあ今度一緒に有咲の家に行こうよ。有咲も歓迎してくれるから！」
「や、遠慮しとく。市ヶ谷さん、多分僕のこと嫌いだろうし」
会う度に僕が揶揄うのだから、そうなっても仕方ないのだが。
市ヶ谷さんは、俗に言うツンデレという人種だ。本当はバンドやそのメンバーのことをとても大切に思っている癖して、本心とは裏腹な言動をとることが多い。
それが皆にはバレているから、微笑ましい話で済むのだが。
今まで意識したことはなかったけど、もしかしたら、僕が市ヶ谷さんを揶揄う理由はその姿がどうしようもなくもどかしかったからなのかもしれない。
――一歩前に進めば、君はそれで終わりじゃないか。
――素直に気持ちを打ち明けて、そうすれば、皆に……香澄に、受け止めてもらえるだけじゃないか。
僕は違う。この十年近い恋慕は、決して明かしてはならないものだ。そういうものに、なってしまった。
「そんなことないよ。だって有咲……あ、信号青になった」
だって打ち明けてしまったら、この関係はどうなる？
困ったように彼女は笑って、そうしてごめんと謝るのだろう。
そして、今の関係は崩れていく。

もしそうなってしまったら、僕は……。

……なんて。女々しい自分が、本当に嫌になる――

「ねぇ！　信号、青になったよ!!」

「っ。あ、ごめん」

大きな声で呼び掛けてきた彼女は、不思議そうに僕の目を見ていた。

何だかそのままだと、僕の気持ちが見透かされてしまいそうで、足早に横断歩道を渡った。足腰の筋肉は、それだけで軽く悲鳴をあげている。

逸った気とそれの所為で少しよろめきながらも渡り切ると、後ろから走ってきた彼女は、もう一度僕の前へと出てきた。

「えっと、どうしたの」

「……なんか今日のキミ、変だなって。ぼーっとしてたし、よろよろした歩き方してるし」

その言葉を聞いて、僕は身構えた。

不味い。彼女には、彼女だけには、この胸の内を悟られてはならない。

「あぁ、少し疲れてるのかも。ほら、最近――」

「――ちょっとじっとしてて」

そんな危機感を抱き、言い訳を並べようとした僕は、しかし次の瞬間その口を固まら

せられてしまった。

——他でもない、彼女の行動に。

「ッ」

僕の前髪をかきあげて顕になった額に、彼女自身の額を押し当ててきたのだ。

長く綺麗な睫毛に縁取られた、アメシストの瞳。健康的な色の肌に備わる、整った鼻梁。小さくて、艶のある唇。はっきりと感じられる息遣い。そして、心地好い温かさと、仄かな甘い香り。

それが今、この世で一番僕の近くに在った。

心臓が早鐘を打つ。伴って巡る血流が、体を熱くさせた。手先が一瞬だけ少し震えて、口は半開きのまま化石していた。

「うーん、熱はないみたいだけど……」

そう言って眉根を寄せて離れた彼女を見て、漸く僕の口は活動を再開することができた。

「な、何やってんだよ」
「え？　何って、熱ないか計ってただけだよ？　私のこれ、結構正確なんだ！」
えっへんと胸を張る彼女に、僕は溜め息を吐く。それでも、まだ鼓動は収まりそうにない。
「いや、普通こんなことしないって」
それを誤魔化したかったから、僕は説教でもするみたいに強めの口調で言った。
外で、しかも同年代の異性に。
流石に分かるものかと思っていたが、やはり彼女は要領を得ていないようだった。
そして、また無意識の刃を口にする。
「ダメかな？　あ、でもあっちゃんにも『もうそんなことする年じゃない』って怒られちゃったっけ」
先程とは別の意味で、僕は固まった。
彼女の言う「あっちゃん」とは、彼女の妹のことだ。ここで、彼女が妹の話をしてく

るということは、つまりそういうことだった。

——あぁ、成る程。

どこまでいっても、君は僕のことを家族としてしか見ていないんだね。

改めて知らされるまでもない、たった一つの事実。

それでも、自分で反芻するよりも、彼女から言われるのはやはり痛い。

早くなれなければいけないのに。どうにも、こればっかりは上手くいかないらしい。

だったら——

口元を歪めて、自嘲気味な感情を内包した、外面だけが綺麗な笑みで、僕は彼女に向き直る。

「話は変わるんだけどさ」

「ん？　何々？」

気取られないように、少しだけ息を吸って。

「君が好きな人とは、あれから進展あったの？」

――慣れるまで、この痛みに浸り続けるだけだ。

そうして、僕は彼女に肉薄した。

第３話

群青に棚引く細い雲は、遥か高くから僕たちを悠然に見下ろしている。
グラウンドに散らばるちっぽけな人間を嘲るように、流れゆくそれらは立ち替わり空模様を変化させていった。
そんな空の下で、やる気のなさげな係りの号令に従い、ストレッチを続ける。
「あっつ～……。まだ五月だろ……」
「言っても変わらないよ」
ぼやく友人に返す。彼の言う通り、朝とは打って変わって、春とは思えない熱気が周囲を包んでいる。
つい先程までは柔軟剤の香りがしていたこの体操服も、今やじっとりと汗ばむ体に浸食されてしまっていた。
二人組の柔軟体操を始めた時に、ふと彼が「そういや」と話を振ってきた。
「何？」
「昨日さ、お前の体操服……香澄ちゃんが着てたんだって？」
「……そうだけど」

「マジか！」

やはりと言うべきか、多少の話題にはなっていたらしい。回答を聞くと、彼は暑さでのびきっていた体に力を入れて僕の背中を押す腕に体重を掛けてきた。

筋肉痛も相まって呻く僕に構わず、興奮気味に顔を近づけてくる。暑苦しい。

「隣のクラスのヤツが言ってたぜ？　お前らとうとう結婚したのかって」

「結婚って。別に僕たちはそう言う関係でもないし、そもそも……」

「はっ！　つまりその体操服には香澄ちゃんの匂いが……って汗臭ッ!!」

「うわ、嗅ぐなよ気持ち悪い！」

「へへっ、悪い悪い」

首筋にかかる生温かい吐息に、背筋が凍った。本当に気色悪いヤツだ。

思わず振り払った僕に、悪びれる様子もなく謝罪する彼をひと睨みして溜め息を吐く。悪い人間ではないのだが、少々悪ふざけが過ぎる一面があると思う。今のは本気で殴ってやろうかとも思ったくらいだ。

ストレッチの過程が全て終了すると、今日はサッカーをするらしく、道具の用意をするようにと指示が出た。

倉庫に向かい、ボールが入れられている籠を探す。倉庫は狭く物は乱雑に置かれてい

るので、先ずは前にあるものを退かす必要があった。
退かす度に舞う埃に辟易している時だった。
「……なぁ、お前らって本当に付き合ってないの？」
そんな塵芥よりも、何よりも。僕の心に堆積した黒い何かが揺れるような質問が投げ掛けられた。
一瞬で心の中を切り替えて、うんざりとした声音を作った。
「だから、付き合ってないって。なんで幼馴染ってだけで疑われるんだろうね」
彼の方を振り向き、苦笑してみせる。その裏に全てを捻じ込んで隠す。僕の常套手段。
「そりゃあお前、香澄ちゃんとめっちゃ仲良いからに決まってるじゃん。今更香澄ちゃんの名字が戸山じゃなくなっても、驚くヤツなんていないって」
「大袈裟すぎ」
笑い飛ばして、道具を運びながら倉庫を出る。
何気ない一言を、何気ないふりをして受け取る。それがどれだけ僕の心を摩耗させるのかなんて、きっと目の前の彼は微塵も解っていないのだろう。解られては困るのだが。
僕と彼女の関係は、周りから見てもかなり良好なものに映るらしい。そのこと自体は

否定しないし、事実そうなのだろう。

でも、彼らに見えるものと現実とでは、少しの、そして明確な齟齬がある。そしてそれが、こうして翻しようのない事実として耳朶を打つ。

堪らなく苦痛なその瞬間を、僕は笑ってはぐらかすのだ。

今日も、明日も、明後日も。

……正直、見縊っていたのかもしれない。慣れなければと頭で考えて吐いても、奥の方で蠢く何かは、その思考を許さない。

――本当にそれでいいのか？　お前の今までの研鑽は？　彼女への気持ちは？　どうなる？

声が聞こえる。僕自身の、醜い声だ。

――可笑しな話じゃないか。自分が自分で居られなくなるから、お前は彼女を応援すると言った。だがその為にお前はお前の心を殺している。矛盾していると解っているのか？

自問。

――解っている。解っているよ。そんなことは。
自答。
――その矛盾はいつか、お前を殺すぞ。
声は、尚も囁く。
――だったらその時は、死んでやるよ。
僕は、尚も吠える。
愚かだと言う自覚はある。だが解ってはいても、そう簡単に変わることなんてできない。
であれば、やることは変わらない。
火に焼かれ爛れた皮膚が、その痛みを感じることができなくなるように。
その時まで、炙られ続けてやる。
もう僕にできることなんて、それしかないのだから。

▽

今朝のことを思い出していた。
唐突な僕の質問に、彼女は少しはにかみながら笑い、放課後に話したいことがあると

言ってきたのだ。
その笑みは、幸せそうな、僕ではない誰かに向けられた笑み。
そう理解した瞬間に、漏れでそうになった僕の中の何かとても黒いものを、ぐっと抑え込んだ。
それでいい。そうでなければ、この話をしている意味がない。
抑え込んだモノを飲み込む嗚咽の代わりに僕の口から飛び出たのは、耳当たりの良い快諾の言葉だった。
嬉しそうに彼女が礼を言ったところで、学校に着き別れた。
だけどその場で聞けなかったからか、僕の意識はその問題について宙ぶらりんの状態を維持したままでいる。
喉に小骨が引っ掛かったかのような気持ちの悪さが、他への神経を散漫にさせたのだろう。
その結果がこれだ。
「痛っ……」
思わず独りごちる。
赤く腫れ上がった足首は、ジンジンと熱を帯びた痛みを伴い存在を主張している。
異様に重たくなった足を引き摺って、保健室を目指していた。

プレイの最中に対戦相手とぶつかって、足を捻ってしまったのだ。普段ならば絶対に犯すことのない、しょうもないミスだった。それも、考え事をしていた僕の非だろう。

申し訳なさそうに保健室へ連れて行くと言った相手の提案をやんわりと断って、一人でここまで来ていたのだが、思いの外痛みが酷い。断ったことを少し後悔した。

いつもの倍以上の時間をかけ、ようやっと辿り着いた扉を開ける。

「失礼します……って、市ヶ谷さん」

挨拶をして中に入ると、ベッドに腰をかけている見知った少女を見つけた。

彼方も唐突な生徒の来訪に驚いたらしく、大きな瞳を見開いている。

「っ。……あ、なんだ、お前か」

びくりとしてから僕の姿を確認すると、安心したように一息つく。ぱっちりとした二重の目が印象的な彼女は、市ヶ谷有咲さん。

Ｐｏｐｐｉｎ，Ｐａｒｔｙのキーボード担当であり、学年でもトップクラスの秀才として名高く、そして――

「またサボり？　評定落とすよ、優等生の市ヶ谷さん」

「うるさいな。サボりだってバレてないし、欠席分はテストでどうにでもなるからいいんだよ」

――サボり魔だ。

ベッドの上でふんぞり返る彼女だが、中学生の頃は不登校だったらしい。
そう考えると、こうして登校している分にはまだ良いのだろうか。
「あれ、先生は?」
「備品の交換だってさ。暫くは戻らないみたいだけど」
「マジか」
困ったことになった。捻挫のテーピングなんてしたことがないものだから、適切な処置がわからない。それに保健室の道具を勝手に弄っていいものか。
頭を悩ませる僕に、市ヶ谷さんが声を掛ける。
「マジだけど。そういや、お前は何でここに?」
「あー、これ。足首ひねっちゃってさ」
「うわっ、めっちゃ腫れてるじゃん! 大丈夫なのか!?」
理由を尋ねた彼女に足を差し出して見せると、再び目を見開いた。彼女の視線と自分の意識がそちらに向いた所為か、逸れていた痛みがやってきて顔を顰める。
「大丈夫じゃないから来たんだけど……。参ったな、先生いないんだ」
ひょこひょこと足を庇う変則的な歩き方で棚に向かう。待っている場合ではないなと思い直し取り敢えず応急処置だけでもと色々探してみるものの、こうして来たのは初めてなのでどこに何があるのか全く分からない。

ガチャガチャと棚を荒らす僕を見かねてか、市ヶ谷さんは溜め息を吐くと僕の横に立ち、勝手知ったる風に湿布などを取り出す。
「私がやってやるから。お前は座ってて」
「え、いいよ。悪いし」
「傍でゴソゴソやられる方が気になるっての。それに、ちょっと訊きたいこともあるから」
「訊きたいこと？」
チラリとうかがった横顔から読み取れるものは何もなかった。取り敢えず彼女の言葉に従って、丸椅子に腰掛ける。手際よく準備するその後ろ姿は、小柄な筈なのにどこか頼もしく見えた。
暫くぼうっとその背中を眺めていると、不意に振り返った彼女と目が合う。
「準備できた……って、な、何だよ？　ジロジロ見て」
居心地悪そうに身を捩る彼女が僕を睨む。苦笑しながら、思ったことを口にした。
「いや、市ヶ谷さんは頼もしいなって。さすが香澄の保護者」
「おい待て。いつからそんな肩書きが付いた？」
「不満？　なら保健室の主とか」
「どっちもやだっての」

「じゃあ香澄の主で」
「何で混ぜるんだよ！」
今日も市ヶ谷さんのツッコミの鋭さは健在だ。面白いので、もう少し弄ってみることにする。
「だって市ヶ谷さん好きでしょ？」
「なっ。そ、そりゃあまぁ好きか嫌いかで訊かれたら……その、別に嫌いじゃねぇけど……」
頬を少しだけ染めて俯きがちになり、威勢の良かった口調も段々と尻窄みになっていく。
よっぽど好きなんだろうなと微笑みながら、僕は一言だけ補足した。
「保健室」
「そっちかよ！」
「え？　何のことだと思ってたの？　あ、もしかしてかす――」
「――あーもう！　うるせーっ!!」
爆発するみたいに声を張り上げる。感情の起伏が激しい子だなと、そうさせたのにも関わらず他人事のように分析した。
やっぱり市ヶ谷さんは弄ると楽しい。肩でぜえぜえと息をする彼女が、大きな目でギ

ロリと僕を睨んだ。
「ごめんごめん。面白かったからつい」
「隠す気すらないのかよ……」
「おたえみたいなボケしやがって」とぼやく市ヶ谷さん。
おたえとは、ギター担当の花園たえさんのことだ。彼女は所謂天然の入った人なので、市ヶ谷さんのツッコミの鋭さには、彼女も貢献しているのではないかというのが僕の考えだ。
素でボケる彼女の方がタチが悪いのではないかと抗議しようと考えたが、僕も大概なことに気付いて口を噤む。
「……ったく。じゃあ、始めるからな。痛かったら言えよ」
「お願いします」
それでもテーピングをしてくれるあたり、彼女の人の良さが見てとれる。
前屈みになった市ヶ谷さんがテープを剥がす音だけが、静謐な保健室を支配する。
女の子に治療されることなんて初めてなもので、僕はというと情けのないことに喋ることもできなかった。
いくら上っ面だけ変えても、幼い頃からの内向的な性格の一片は残ってしまうものなのだと実感していると、市ヶ谷さんが僕に話しかける。

「で、訊きたいこと、なんだけど……」
「あ、うん。僕が答えられることなら、何でも教えるよ。どうしたの？」
緊張していたことがバレないようにと、できるだけ柔和な表情で受け答える。対して市ヶ谷さんは、少し躊躇した風に、小さく答えた。
「……香澄のことなんだけど」
少しだけ、息が詰まった。
「……香澄の」
「うん、最近さ、上の空っつうか。考え事してることが多いんだよな」
顔は僕の足を向いているため、その表情は見えない。けれど声音からは彼女のことを心配していることが分かる、そんな声だった。
「幼馴染のお前なら何か知ってるんじゃないかって、思ったんだけど……」
ぺたりと貼られた湿布の冷たい感触と、顔を上げた市ヶ谷さんの憂いを帯びた目線。
口止めはされていないが、そのことは彼女自身がバンドの皆に言った方が良いのだろう。僕はそれとなく伝えようと口を開く。
「それは……」
「それは？」
「……」

だけど、僕の口がそれから先の言葉を紡ぐことはできなかった。
彼女には好きな人がいて、そのことを考えているだけだよと。だから心配する必要などないのだと。
そんなことをぼんやりと伝えればいいだけのこと。数秒しか要さない、些末事。
彼女を心配している市ヶ谷さんの懸念を解消させる為にも、そうした方が良いのは分かっている。分かっている筈なのに。
「……ごめん。考えてみたけど、やっぱり分かんないや」
「そっか。悪いな、変なこと訊いて」
「や、僕の方も役に立てなくてごめんね」
きっと僕は、恐れたのだ。
その事実を自分の口にすることを。自分ではない誰かを好いているという現実を口にすることが、堪らなく怖いのだ。
どうやら想像以上に、僕は重症だったみたいだ。どこまでも愚かで、醜くて、弱かった。
自重の笑みを市ヶ谷さんに向ける。申し訳なさそうに眉尻を下げて、外向けの鍍金を施した笑顔。
「何か分かったら教えるよ。手当てのお礼になるかはアレだけど」

「ん。ポピパの皆も気にしてるから、何かあったら頼むな」
しゅるりと巻いた包帯を止めて、市ヶ谷さんもにこりと微笑む。テーピングが終わった。
「ありがとね、市ヶ谷さん。……じゃ、僕は授業に戻るから」
「おう、じゃあな」
扉を開けて、廊下へと出る。
「……ごめんね、市ヶ谷さん」
聞こえる筈もない謝罪を、ぽつりと呟いた。
きっと僕がそれを言える日なんて、絶対に来ないだろうから。

▽

「お待たせー！」
「本当に待ったよ。再テストに何分かかったのさ……」
「えへへ、ごめんごめん」
放課後。
数学の再テストがあったらしく、先に行って待っていて欲しいという連絡を受けてか

ら、かれこれ三十分以上は経っていた。
　この足なので先行できたことは有り難かったが、よもやここまで待ち惚けをくらうことになるとは思ってもみなかった。
　集合場所は近所のファミレス。走ってきたのか息を整える彼女に、先にと注文していた香澄の分の飲み物を渡す。
「ありがとー！　はぁ～、生き返る……」
「それで、話ってなんなの？」
「あっ、そうだった！」
「そうだったって。その為に集まったんだからさ……」
　彼女の奔放さには、何年一緒にいても驚かされることがある。
　溜め息を吐いた僕に、彼女は苦笑した。別段怒っている訳でもないので、気にすることではないが。
　そうした後ふと彼女を見やると、空になったグラスを両手で握って、少し緊張した様子だった。
「えっとね……」
　いつもの彼女とはそぐわない、そんな雰囲気。
　またきっと、聞きたくもない話を聞くことになるのだろう。協力を申し出た身分で実

に勝手なことを考え、僕は身構えた。

そうして僕の鼓膜を震わせたのは――

「今週末、デートに行こうよ！」

「……は？」

――全く予想していなかった言葉だった。

第４話

唐突な言葉に一瞬だけ停止した思考は、しかし彼女が手早く店員にオーダーを済ませた頃には、もう平生のそれを取り戻していた。

その意味を咀嚼してみると、深い水の中に浸かるように、頭がすっと冷えていく感覚を覚えた。店内にかかる流行りの歌が、耳に強く残る。

「それは、下見みたいなもの？」

「うん！」

あっけなく答えられた。別に期待なんかしちゃいなかったが、その屈託のない表情を見ては、目を逸らす為にグラスを呷って中身を飲み干す。随分と渋いお茶だった。

君の目には僕は見えない。

君の瞳に映っているのは、他の誰かの背中。

その背中に、僕を重ね合わせて。薄っぺらいフィルターを通して君が見るのは、僕がこんなにも焦がれている君自身の隣にいる、他の誰かなのだろう。

飲み干しておいたグラスに目を遣る。中の氷が、カランと空虚な声をあげた。兎に角、彼女と目を合わせるのが辛かった。

「でもさ、僕と二人で出掛けたら変な噂になるかもしれないけどいいの？」
だからこれは、ささやかな抵抗だ。
彼女がここで止まってくれたら、少しでも躊躇してくれたなら、僕はまだ止まることができる。
彼女へのではなく、僕への最後通牒だった。
「そもそもこんな風に会ったりするのも、見られたりしたらマズいんじゃないかな」
畳み掛けるみたいに続け様に言う僕を、彼女はきょとんとした顔で見た。本当に何を言っているか分からないとでも言うように。
そんな彼女は少しの躊躇いもなく、僕のそれを一蹴してしまう。
「大丈夫だよー。だって私とキミだよ？　みんな疑わないって！」
……。
「そっか。香澄がそう言うなら付き合うよ」
「本当に!?」
「うん。協力するって言ったしな。役に立てるかはわかんないけどね」
「ありがとう！」
……まぁ。
こうなることなんて、分かりきっていたことだが。

グラスを握る手に、結露した水が伝う。この水と同じだった。止まることなんてできない。然るべき力に従って、滑り落ちて……後はどうなるのだろう。僕にはまだ分からない。

「どういたしまして。て言うか、誰か教えてくれたらもっと詳しくアドバイスできるんだけどなぁ」

「う、それは恥ずかしいから……」

「僕にでも？」

「キミでも。と言うか、キミだから！」

「……そか」

分かっていることは、ただ進み続けなければならない。そんなクソッタレな現実が目の前に広がっていることだけだ。

「下見って言うけどさ、行く場所とかはもう決まってるの？」

「キラキラドキドキする場所！」

「……具体的に決まってないってことだけはよく分かったよ」

「そ、そんなことないよ～？　ちゃんと決めてあるから！」

「へぇ。ま、そこは香澄に任せるよ。じゃないと付き合う意味ないし」

「もっちろん。私に任せて！」

胸を張る彼女の元に、店員がプレートを運んできた。鉄板の上で焼ける肉汁が香ばしい匂いで鼻を擽る。彼女が注文したのはハンバーグだった。
「ガッツリ食べるなぁ。太るよ?」
「だ、大丈夫だよ！　今後のライブで消費するから！　……多分」
「多分って……」
「あー、疑ってる。歌うのって結構カロリー使うんだよ！　ほら、カラオケでも消費カロリー出るし……あ！　ねぇねぇ、デートの時カラオケ行こうよ！」
「んー、その人が歌うの好きならいいけど。香澄が歌いたいだけだろ」
「う……」
「まぁ、いいんじゃないの？　僕は香澄の歌、好きだし。その彼にも聞かせてやれば」
「本当!?　気に入ってくれるかな？」
「……うん。僕が保証するよ」
こんなあからさまな点数稼ぎなんて、何の意味もない。これはただの自己満足だ。
そいつが香澄の歌を気に入らなければいいと思ってしまうような、クソ野郎の。
それから僕たちは、その日の予定について話した後、暫く雑談をしていた。
最近学校であったこと、バンドの皆の話、バイトの時に来店した常連さんが買うパンの多さ。

下らない日常の話で笑い合って、時折僕が言う冗談に、彼女がむくれたり、やっぱり笑ったり。

何気のないそんな時間が、僕はとても好きだった。

でも、今は。

楽しいとは思っている。けれど弾む彼女の声だとか、笑った時に細められる目だとか。テーブル越しの彼女は、実際はもっと遠い場所にいるのではないかと。錯覚はリアルな像を象って僕の胸に去来する。

その度に、僕はグラスを呷る。苦い感情、辛い感情、そんなものは全て飲み干してしまえ。そうして、いつもの僕を彼女の前で演じるのだ。もう消えてしまった、過去の僕を。

そういった意味では、僕はそこのハンバーグと似ているのかもしれない。

誰だって肉を食べる度に悲鳴をあげて殺されていく牛や豚の姿なんて想像したくはないだろう。

屠殺され、解体され、血抜きされ、切り取られ、整形され……。

その過程は基本、人の目に晒されることはない。当たり前だ。それを目にすることなど、人は望まないからだ。

罪悪感に苛まれるだろうし、見ていて単純に気持ちが悪いと思う人だっているかもし

れない。
僕の醜い感情も、彼女へ余計な負担を掛けるだけのもの。だから僕は隠す。隠し通してみせる。
殺して、解体して、血抜きして、切り取って、整形して……。
そうして美味しいハンバーグは、彼女の口へと運ばれるのだ。
その過程は、誰にも見られてはならない。誰にも知られてはいけない。そうすれば、誰も不幸にならない。
……まるで、機械だ。でもそれでいい。彼女の為ならば、僕は機械にだって肉にだってなってみせる。
だってそれが、狂いそうになるの僕の、唯一の指針なのだから。
たとえその指針さえもが狂っていると言うのなら、それでも構わない。
もう僕には、この道しか残っていない。道の先にあるのは、屠畜場。
勿論僕は、運ばれる牛だ。

▽

コツコツ。コンクリートを叩く爪先が硬質な音を立てる。
待ち合わせに指定された駅前を目指して歩く。あれほど痛かった足首は、もうほぼ完治に近い状態に戻っていた。今度市ヶ谷さんに会ったら、お礼をしなければならない。
そんなことを考えながら、腕時計を見る。もう着いてしまったが、待ち合わせにはまだ少し早い時間だ。早めに着いて、気持ちの整理をつけておきたかった。
思い返してみれば、彼女と二人きりで出掛けることなんて初めてかもしれない。
遠出するときなんかはどちらかの両親や、彼女の妹の明日香ちゃんがいた。
幼い頃に公園で遊んでいたことがお出掛けというカテゴリーに入るのなら話は別だけど、こうして何処かで待ち合わせて、というのはしたことがない。
そうしたい願望はあった。遅れてごめんねと言いながら此方に駆けてくる彼女は、いつもより少しだけお洒落をしていて。そんな彼女と手を繋いで寄り添いながら歩く。
とんだ笑い話だ。幼稚な妄想は、その練習台として実現してしまうのだから。
ふっと笑い、空を見上げる。
天気は曇り。僕の初デートに相応しい、鉛色の雲が空を覆っていた。
「おーい！」
彼女の声がした。

振り向くと、前方から走ってくる彼女が視界に映る。
綺麗めなプリーツスカートに、カジュアルなデニムジャケット。春らしい色合いのそれらは、とてもよく彼女に似合っていて。正直、見惚れそうになった。
でも、これは練習。
そう考えると、彼女を前にした瞬間の浮ついた心は、ぴたりと元の位置に納まる。
早めに此処に来たのは正解だった。幾分かは落ち着いた心持ちで対応できそうだと安堵しながら、手を挙げる。
「よっ。意外と早かったね。君のことだから、遅れるかと思ってた」
「私だってそれくらいはちゃんとするよー。だってデートだもん！」
「練習だけどね」
僕が付け加えると、彼女はむっとした表情になる。
「もう、練習だって考えてたらダメなんだよ。練習は本番のように、本番は練習のように、だよ！」
「それ、誰の受け売り？」
「紗夜先輩が言ってた！」
実力派のガールズバンド、Ｒｏｓｅｌｉａのギタリストである氷川紗夜先輩。僕らの一つ上の先輩で、会ったら多少話をする程度の仲なのでそれほど彼女を知っている訳で

はないが、兎に角真面目な人だという印象が強い。
「あの人らしいね」
「うんっ。じゃあ行こっか！」
言いながら、彼女は僕の手を握る。その感触に跳ねる心臓を抑えて、僕も握り返す。
自分の鼓動の筈なのに、遠く聞こえる残響のようなそれをぐっと噛み締めて、僕は彼女の隣を歩くのだ。
赦されるのならば、遠い日の夢を照らし合わせてと。そんな願いを抱えながら。

▽

こうして始まった僕らのデートは、順調に進んでいった。
ショッピングモールを彷徨いたり、昼ごはんを食べたり、当てもなくぶらつきながら談笑をしたり。彼女の要望だったカラオケにも行った。
破天荒な性格の彼女だから、突拍子のない行動に出ることもあったが、所謂男女のデートという型に概ね当てはまった行程は、僕に意外の念を抱かせた。
でもそれはきっと、彼女も緩やかながら変化をしているということの裏返しなのだろ

う。

僕が見ていた彼女という人間は、横たえる時が作り上げた固定観念の塊で、それこそ彼女とは別の意味で、僕は彼女のことを見ていなかったのかもしれない。

だとしたら、やっぱり僕が彼女の横に立つ資格なんてないのだろう。

今日はそれが分かっただけでも充分だ。

抱いた夢は、綻びながら消えていく。幻が朧げに霞んでいく。

風が吹き、雨が降り、夢が醒める。全て自然の成り行きだ。

「今日はありがとね」

帰り道。彼女がぽつりと呟く。

「ううん、僕の方も楽しかったから。こっちこそありがとう」

「どういたしまして！　で、いいのかな?」

「僕に訊かれても」

「あははっ、そうだよね」

上機嫌な彼女が笑いながら先を歩く。彼女の背中を見つめながら、少し後ろを歩いていた。

暫くの間そうしていると、不意に彼女が振り向く。後ろ姿を見ていた僕は何だかきまりが悪くなって、視線を相変わらずの曇天に向けた。

「楽しかったなら、良かった」
　そんな僕の耳に、温かい声がするりと入ってきた。
「最近、キミが落ち込んでるみたいに見えてたから」
「え……」
　その内容に、彼女へと視線を向けてしまう。
　在ったのは、柔らかく優しい、彼女の微笑み。僕は目を奪われてしまっていた。
「だから、今日はパーって楽しんで欲しかったんだ！」
「練習、だったんじゃないの。これ」
　水を差す言葉であると分かっていながら、僕は思わずそう口にした。
　大して気にした風にもせず、彼女はうーんと顎に手を当てて考え込む動作をしてから言った。
「確かに練習したいって思ってたけど……。途中から忘れてた。だって、私もすっごく楽しかったから！」
　彼女の言葉と、眩い笑みが、僕からあらゆる体の動きを奪ってしまったようだった。
　本当のところ、気持ちは重たかった。今こうして立っている彼女の隣という場所は、仮初という足場で築かれた脆さの上に成り立っているものだから。
　言わば建設途中のビルに仮設されるそれと同じもので、本命が建立すれば、直ぐに解

体されてしまう。

この前も思っていたことだが、詰まる所彼女がこの瞬間に浮かべている笑みは、顔も知らない誰かに向けられているものなのだとして、僕は今日一日を過ごしていた。

けれど彼女は、ずっと僕のことを気にかけてくれていたのだ。一人卑屈になり、勝手な喪失感に浸っていたこんな僕のことを。

正直で真っ直ぐな彼女の瞳は、嘘を吐けるほど器用でなければ、汚くもない。

だからこそ、解ってしまう。

彼女の美しさが。そして、自分の汚さが。

こんな時でさえ思ってしまうのだ。

——だったら、僕でいいじゃないかと。

「だからね、また一緒に遊びにいこ！」

……嗚呼。

やっぱり僕は、君の隣にいるには相応しくないのだろう。

諦めにも似た寂寥が湧き上がり、背骨を突き抜ける。その余韻が、僕に響く。

――もう止めにしよう。彼女の傍にいるには、僕はあまりにも弱すぎる。

……そうだ。そうした方が、きっと良い。

変わろうと励んだ研鑽なんて、何の意味も持っていなかった。僕は何も、何一つ変わってなんかいなかったのだから。

囁きに従い、僕は口を開く。

「香澄。悪いけどもう――」

その矢先、二人の間に水滴が落ちる。

いや、僕らの間だけではない。最初はポツリポツリと、しかしすぐにバケツをひっくり返したような激しさを伴って、水滴は落ち続ける。

予報にはなかった雨だった。

「わっ、雨?!　どうしよう?!」

「傘持ってないよー！」と嘆く彼女に構わず、雨は一瞬にしてアスファルトの色を濃くして蹂躙していく。

僕の方も勿論持っていなかったので、抵抗のない布地に水分はどんどん吸収される。このままでは不味い。確か少し離れた場所に、雨を凌げるような軒があった筈だ。

「香澄、こっち！」

「えっ、きゃっ!?」

急いで行こうと彼女の手を掴み走る。

驚きの声をあげる彼女には、後で謝ろう。そんな思いで、僕は雨の路を行った。

程なくして目的の軒にたどり着く。予想通り濡れていなかったそれの下に滑り込んで、二人で息を整えた。

「はぁっ、はぁっ。ごめん、急に走り出して」

「はぁっ、はぁっ、ううん。大丈、夫……！」

「通り雨みたいだから、直ぐに止むってさ」

「良かった～。うひゃー、全身びしょびしょだよ～」

携帯で天気について調べると、安心して一息つき、ぶるぶると犬みたいに首を振る。水滴が此方に飛んできた。

「ちょ、水飛んでくるんだけど――、っ！」

「あ、ごめんねー」
抗議するために彼女の方を向く。すると目に映るのは、絞るためかデニムジャケットを脱ぎ、手にする彼女。
当然、その下のシャツもすっかり濡れてしまっている訳で――

僕は息を呑んだ。

「……ッ！」

――貼りついたシャツが、彼女の下着を透けさせていたのだ。

それを見て、少しの間固まる。固まってしまう。女性らしく丸みを帯びた躰のラインを、柔らかそうな肢体を、僕は凝視してしまっていた。
心なしか荒げた息遣いも、今はとても扇情的なモノに聞こえて……。
「ご、ごめんッ」
我に返り、慌てて目を逸らす。流石に失礼が過ぎる。
彼女からの返答はない。怒らせただろうか、失望させただろうか。不安が募り、僕は

恐る恐るもう一度彼女の方へ振り向く。
すると……。
「？　引っ張られたことなら気にしてないよ。そんなに謝らなくていいって！」
「……は？」

小さく、息が漏れた。

何故だ？
何故そこまで何も危機感を持たずにいられる？
男に濡れた躰を舐め回すように見られて。何故平然としていられる？

――この状況下で、まだ、君は。

僕を欠片も異性として認識していないというのか。

……何だよ、それ。
ふつふつと沸くのは、焼けるような感情。

僕という人間が最も醜く発露する怒り。どうしようもなく理不尽な、負の塊だった。

「どうしたの？」

その声に、もう一度彼女を見遣る。

表情一つでも、人の性格というのは表れるものだと思う。彼女のそれは、黙る僕を不思議に思う心だけが、ありありと浮かんでいた。

思いのままをさらけ出す、そんな彼女に僕は惹かれたんだ。

……でもね。

「うん。実はちょっと、母さんに頼まれた用事を思い出しちゃって」

嘘を吐くことだけに関しては、僕は彼女よりも、何枚も上手だった。

「今すぐ帰らなきゃいけないんだ」

「え、でも凄い雨だよ？」

「大丈夫。家に着けば着替えられるし……ウチの母さんが怒ると怖いなんて、香澄もよく知ってるだろ？」

「あはは、そうだったね～……。二人で夜に外出ようとした時とか、すごく怒られた思い出が……」

「そういうこと」

いつも通りに笑ってみせる。そうすると彼女も納得がいったようで「そっか」と笑った。

「じゃ、僕は先に帰るよ。また明日」

「うん、じゃあね！」

兎に角、この場から立ち去りたかった。これ以上、彼女を見たくなかった。

手を振る彼女に振り返し、僕は雨の中に走り出る。後ろは向かない。向いたら、今まさに堪えているものが、全て決壊してしまいそうで。

雨に駆ける。

五月の雨は蒸し暑い。降りしきる雨水は、容赦なく頭から爪先までを覆い尽くした。

頬に伝うのは、雨か汗か、それとも……。そんなことはどうでもいい。

全てを洗い流すように叩きつける雨が、妙に足取りを重くする。

全てに浸透するように染み渡る雨が、妙に優しく包み込む。

気持ち悪くて、気持ち好い。

春の夕立に僕は遮二無二走っていた。泣きながら、笑いながら走っていた。

第５話

ドアを開ける。乱暴に開かれたそれは大きな音を立てたが、そんなことは気にもならなかった。

体が重い。膝は笑っているし、足首の痛みはぶり返していた。肺が破裂しそうなくらいの激痛が走り、口からは酸素を求める不規則な呼吸音のみが発せられていた。

目の前がチカチカして、玄関先に倒れ込む。母も仕事で家を空けているようで、幸いそれを咎める人間はいなかった。

冷たいフローリングの温度が火照った体に伝播していく。全身に巡る血液に乗って、少しずつ体温は下がっていった。

――僕は一体、何がしたいんだ。

白む頭の中に、一つの疑問が浮かび上がった。

諦めてしまえば楽になれるんだ。勿論そのつもりだ。だってそれしかない。彼女の為なら、僕にできることは全てしてきた。もしかしたら――いやもしかしなくても、それは僕の自己満足なのだろうが。

今回だって同じことだ。

彼女には好きな人がいる。僕が彼女のためにできることと言えば、彼女の恋が実るよう微力であっても協力をすることだ。

言ってしまえば、実に簡単なことだ。選ばれなかった僕は、仕方がない次の女の子を探そうと落ち込みながらも割り切って、時間は必要だろうがただの幼馴染として接すればいいだけ。

別に珍しいことでもないだろう。失恋の話など星の数ほどある訳で、当然その星が辿る軌跡だって同じ数だけある。大半はきっと僕が考えるように諦めて、いずれはその記憶さえ砂の中に埋める。たまに酒の肴にでも引っ張り出して、笑い飛ばす。そんな至極真っ当な選択の筈だ。

今までの血反吐を吐くような徒労に比べたら、笑ってしまうくらいに単純で明快な答え。

そんなことは解っている。何度も自分に言い聞かせたことなのだから。

それでも、僕にとってその選択をすることは、何よりも受け入れることのできない結末だった。

先刻の香澄の姿を思い浮かべる。

気の抜けた表情。幼い頃から何も変わらない、僕を見る瞳。かつてそれに感じていた安堵など今となっては何処にもなく、ただ怒りと哀しみの混色が頭に渦巻く。

彼女を見る度、渦は蜷局を巻くようにグルグルと。その奔流が僕を押し止める真っ当な選択を呑み込んでいくようだった。

そして押し流されるがままに、僕は醜い感情を吐き出しそうになる。

その繰り返しだ。

「……いい加減にしろよ」

呟いて、思い切り自分の頬を殴った。口内が切れたのか、鉄の味が広がった。

鈍い熱が伴って、沈んでいく意識を無理矢理に引き摺り上げる。

そうだ。いつまで足踏みをしているんだ、僕は。最早一つしか残っていない細い道を進みもしないで。

もう戻る場所なんてない。何かを期待して後ろを見返しても、もうそこに道はない。今に分かったことでもないというのに。

――本当に、いつまでこんなことを繰り返すつもりだ。

もう一度、今度は正面から顔を殴る。

バキッと嫌な音が脳に直接響き、鼻から何かが伝うのを感じた。床に落ちた雨水に混ざって薄くなっていく赤色を見て、少しだけ気分が晴れた気がした。

ふらりと立ち上がる。取り敢えず濡れた床を拭いて、シャワーを浴びよう。そしてもう、それで終わりにしよう。

この痛みを、過去に縋る自分自身への手向けにして。

僕はこれからも、独り相撲を続けるのだ。

▽

香澄とのデートから二週間。

貼り付けた仮面は、漸く根を下ろし始めていた。

普段通りに学校へ行き、授業を受け、友人と遊び、バイトをこなして、そして――

「でね、着ていく服とかどうすればいいかなー？」

「僕に女物の服のこと聞かれてもなぁ……」

――彼女の恋愛相談に乗る。

向かい合わせに座って僕の机に突っ伏しながら訊いてくる彼女は、どうやら想い人とデートの約束を取り付けていたらしい。

最近になって相談の頻度は増えていた。相談というか、所謂惚気とも取れる内容の時も多い。今日そいつと話したこと、こんなことを言われたのだとか、こんな風なことで笑ったのだとか。そんな些細なことを、彼女は幸せそうに僕に話してくれる。

目の前の幼馴染が、どんな思いを腹に抱えながら自分の話を聞いているかなど露ほども知らずに。

とは言え、もうそれに痛みを感じることは殆どなくなっていた。擦り切れて消えてしまう程に摩耗してしまったのかもしれない僕の心は、きっと痛覚という感覚を真っ先に切り捨てしまったのだろう。

本来バイタルサインとして機能する筈のそれは、彼女のことを見る度僕を殺しかねない激痛として働きかけていた。いつも通りという化けの皮が強引に剥ぎ取られるような、そんな激痛だ。

だから排除されるべきは痛みでなくそれを伝達する受容体であるというのは、案外合理的な判断なのかもしれない。

こんな風に俯瞰して考えることができるくらいには、僕の頭は彼女への恋情を割り切

れている。そう思っている。
だからこそ、こうして彼女の話を聞くことは今の僕にとって必要な工程なのだ。何処までが平気で、何処からが駄目なのか。愚かな自傷行為とも取れるこの耐久試験は、今後香澄と関わる上で必ず必要になってくる。彼女の幼馴染として、ごく普通に接していくために。
何も起こらず平穏に、彼女と僕の縁が途切れるのならそれ以上の結末はない。
だが皮肉なことに、積み重ねた年月と関係がそれを許すことはなかった。香澄に好かれようと行ってきた行いの全てが、僕を其処に縛り付ける。
逃げ道があるのであれば、僕は惨めたらしくそれに飛び付くだろうが。
こんなことを考える時点で、僕はきっと何も割り切れてなんかない。あまりにも惨めな自分自身への嘲笑が顔に浮かんだ。
「もう、真面目に考えてよ～」
「いや、だから分かんないんだって。まぁでも、そんなに気にしなくてもいいと思うけどな」
「え、なんで？」
「香澄は可愛いから、何着ても似合うよ」
不満げに唇を尖らせる彼女を向いて微笑みながら伝える。

嘲りの笑みを柔和な微笑みに変換して、そんなことを宣う。
もう慣れたものだ。
言った瞬間、彼女は言葉に詰まったように目を見開き、固まった。そうして、少しだけ頬を染めてにこりと笑う。
「そ、そうかなー？　えへへ……なんか、照れるね」
彼女の反応を見て、溜飲を下げる。下劣な自己満足に浸る。こうやって、自分の負った古傷を慰めていた。
「でも、キミからそんなこと言われたの初めてだからびっくりしちゃった」
「……そうだっけ。……ずっと前から思ってたんだけどなぁ」
不思議なものだ。前まで言えなかった僕の本心は、失恋という二文字を呑み込んでしまえば居場所を奪われたかのようにするりと抜け出ていく。こんなことを口にするにしても、もう遅すぎると言うのに。
「え」
「なにその反応。もしかして引いた？」
「う、ううん！　違うよ！　でも、そんなの――」
慌てふためく香澄をぼんやりと眺める。
あまり見たことのない表情だった。今こうして見たように、多分僕が知らない香澄の

表情なんてものはもっと沢山ある。でもこれから先、僕がそれを見ることは叶わないだろう。

彼女の反応を慰みものにして古傷を癒し、僕のいない彼女の先を想起して古傷を抉る。下劣で愚かしい循環が生まれようとしていた。

「あ、戸山さーん」

「っ、はーい！　どうしたの？」

そんな折、香澄のクラスメイトであろう女子生徒が、扉から此方を覗いて話しかけていた。

「今日の日直戸山さんだよね？　日誌早く出せって先生が言ってたよ」

不意に呼ばれた彼女は不思議そうな顔をしていたが、クラスメイトの言葉を聞くと思い出したと言わんばかりにギョッとした表情になる。

「あぁっ、忘れてた！　ごめんね、ちょっと行ってくる！」

言うや否や彼女は駆けて教室を出て行った。勢いよく立ち上がった拍子に、ふわりと優しい香りが鼻を擽った。シャンプーだろうか――そんな推測をする前に、その香りは燻るように消えていく。僕は目線を下に落とし、彼女が来る前まで解いていた数学の問題集に再び神経を注いだ。

彼女の相手をするのよりも、これの方が余程落ち着けた。何も考えず、ただ目の前の

解を求めればいいだけだから。
そこに一つしか有り得ない答は、シンプルに紙面の上で表すことが出来る。
こんな風に、人の心や行動にも全て公式と解が存在していればなと、益体のない思考が脳裏を過る。
そうであったなら、きっと僕は――
……いや。それは可笑しな話だ。
一分一厘のズレをも許さない問答の中で、「そうであったなら」も「きっと」も言語道断だ。そんな曖昧が許される筈もない。
僕もいい加減未練がましいものだと、一人苦笑してしまう。でも仕方の無いことなのだろう。これもまた記号化することの出来ない、人の持つ感情というものなのだから。
だが、少なくとも。
――今の僕に、そんなものは必要ない。
息を吐き、頭にかかる靄を追い出す。
今度こそ無駄な思考を取り除き、僕は数字と記号の海へと身を投げた。

▽

十ページ近い量の問題を解き終え、シャープペンシルを放り伸びをする。
心地好い疲労が和らいでいく感覚に、久々に幾許かの充足感を覚えた。
西陽が目に差し込む。曇りや雨が続いたここ数日で、今日は珍しい晴天だった。
ふと窓から下に広がる中庭を見ると、木の下に設置されたベンチで男子生徒が本を読んでいた。
こんな日に外で読書をするというのは、何とも気持ちがよさそうだ。
折角だし、久しぶりに図書館で本でも借りていこうか。
何を読もうかと考えあぐねていると、扉が開く音がした。その方に顔を向ける。
「あれ、キミまだ残ってたの？」
「山吹さん」
そこに立っていたのは山吹さんだった。
「勉強してたんだ。わ、すっごい進んでるね」
「もう今日は終わりにするけどね。流石に疲れた。……山吹さんはどうしたの？」
「あ、そうそう。香澄どこにいるか知らない？　さっきから探してるんだけど、見つからなくて」
今日も蔵で練習なんだけどな、と山吹さんはぼやく。ただ日誌を提出するだけならとっくに終わっていてもおかしくないが、何かあったのだろうか。

香澄のことだから、何処かで油を売っている可能性は大いにあるが。
「ちょっと前までここにいたんだけど、日誌の提出があるって出て行ったよ」
「そうなんだ。じゃあまだ職員室か、先に行っちゃったのかも……って。あれ、香澄？」
そう結論づけようとした山吹さんだったが、香澄を見つけたらしい。けれど窓の外を見た山吹さんの呟きには、何故か少し当惑の色が滲んでいるような気がする。
「どうかした？」
気になった僕も、山吹さんの横に並んで中庭の様子を見てみる。
――そうして、僕は自分の目を疑った。
確かに、彼女はそこにいた。僕は彼女の姿を視界に認めて、直ぐに山吹さんの困惑の原因に気がついた。
でも別に、香澄自身に異常がある訳ではなく。僕の友人が見て曰く魅力を増したという彼女の爛漫な笑みは、全くの変化もなく向日葵のように咲いていた。
――彼女の横にいる、先程の男子生徒に向かって。
「――」

瞬間、何か聞こえた気がした。
それは僕が何かしら発したのかもしれなかったし、山吹さんが何か言ったのかもしれなかった。
五感さえも朧げに薄れてしまうような衝撃は、斯くして僕に覆い被さってきたのだ。
……覚悟はしていたさ。
いつかそういう場面を――彼女が僕でない誰かの横で笑う光景を、目の当たりにすることを。
だからその『いつか』を僕は受け止めて、同時に疼き広がる傷だって押し殺してしまえるようにと。今までずっと、そう思ってきた。
しかし酷く勝手な言い分ではあるけれど、僕は不意打ちを喰らったも同然だった。目にも――いや心にも留まらぬ素早さで、受け止めるだの押し殺すだの、何か動作を起こす暇もなくソイツは僕の喉元に喰らい付いたのだ。
今まで言葉としてでしかその存在を知らず、僕の脳内を霧のように漂っていたソイツは、唐突に現実のモノとして実体化し現れた。
……嘘であって欲しかった。

――だって。

彼女が笑う横のそいつは、その笑顔に戸惑うように辿々しく笑い返し何かをボソボソと呟くだけで。彼女の目を見て話すことなんか、全くしていなかった。

――だって。

ただ伸びているだけの髪の毛から半分だけ覗く目には、何処か陰気な印象を受けた。必死になって整髪剤の使い方を勉強したり、床屋通いをやめ顔を真っ赤にしながら美容室を訪れるなんて努力は、きっとしていないだろう。

――だって。

明らかにか細い体には、頼り甲斐を感じさせる要素は微塵もない。苦手だった運動を日課に取り入れ、身体中に走る筋肉痛を耐え抜いた経験など、きっとそいつには有りもしないのだろう。そんな爪痕は、全くなかった。

だってそんなの、まるで。

まるで――

――昔の、僕じゃないか。

程なくして、二人は別れた。

彼女は走り去っていき、そいつはまた読書を再開していた。

でも、僕はまるでその場で化石したみたいに、動くことすら出来ずにいた。瞼すら動かず、ただ案山子のように棒立ちのまま。

「……驚いたなぁ。まさか香澄にあんな仲良さそうな男子がいたなんて」

山吹さんがそう言って、僕はこの場にいたのは自分だけでなかったことを漸く思い出した。

そして、もうすぐ彼女も此処に戻ってくるであろうということも。

――不味い。

しかし。

いつも通りを繕い直すだけの余裕が、この時僕にはなかった。

「ね、キミは知ってた？　香澄に――」
話しかけてきた山吹さんの言葉が、言いかけのままそこで静止した。
同時に、僕を見る山吹さんの表情に先程とは違う動揺が浮かぶ。
それほど、僕は見ていられないような顔をしていたのだろうか。
正直自分でもよく分からない。泣いているような笑っているような怒っているような。醜悪なまでに歪んだこの内情が、単一に形容するのは不可能な表情を造っていたのだろう。
「……」
声にならない声が、一瞬だけ僕の口から漏れ出した。これが自分の口から飛び出たものだと思いたくない程に、それは惨めで矮小な慟哭だった。
「あぁ、うん。……僕も知らなかったよ。……知らなかった」
思わず踵を返す。居ても立ってもいられなかった。
「今日はもう帰るよ。練習、頑張ってね。……じゃあ」
足早に教室を出る。
後ろで山吹さんが何か言っているような気がしたが、気に留める余裕もなく。歩調は段々荒くなっていった。
靄が晴れた先の光景は、ずっと脳裏にこびりついたまま。振り払えなどしない靄以上

の何かが、ずっしりとのしかかっていた。

これ以上ないくらいに、無様で惨めで滑稽な敗退だった。